

論文

縁起経釈にみられる経部的要素

中 島 正 淳

【抄 録】

経部 (Sautrāntika) の形態を解明するためには、経部の思想を抽出し、体系化する必要がある。しかし、経部は有部の異端派としての位置づけであることから、彼らの思想の多くは有部の論書の中に断片的に引用されるに過ぎない。そのため、資料的な限界もあって、経部の思想を体系化することは困難を極める。ただし、経部所伝と呼べるテキストも少なからず存在する。たとえば、馬鳴の『サウダラナダ』や『ブダチャリタ』、クマララータの『喩鬘論』、ハリヴァルマンの『成実論』、そして世親の『成業論』等である。そして、近年では松田 (1982b) によって、世親の『縁起経釈』もまたこの経部所伝のテキストとして位置づけられるという仮説が提示された。ただし、その後、この松田 (1982b) の仮説を検証した研究はなく、ただ漠然と『縁起経釈』が経部所伝のテキストとしてみなされているのが現状である。そこで本稿では、松田 (1982b) の研究を受けて、『縁起経釈』が果たして経部所伝のテキストとして位置づけられるのかを『縁起経釈』の全体にわたって精査し、経部の思想との対応関係を検証した。そしてその結果、『縁起経釈』には、形色の極微、心不相応行法、無表の否定や、四大種の共存や、過去の業からの生起、煩惱の未断・已断、随眠の解釈、論よりも経を重視するなどといった、経部のものとされる思想と共通する思想が多く説かれていることが明らかとなった。以上のことから、松田 (1982b) の指摘するように、『縁起経釈』は数少ない経部のテキストとして位置づけられるということを証明した。

キーワード：経部、『俱舍論』、『縁起経釈』、世親

1. はじめに

経部の形態が未だ十分に解明されていない原因の一つには、資料的限界の問題がある。すなわち、『俱舍論』や『順正理論』等には譬喩者や経部の思想が説かれるが、これらはあくまで

も有部の対論者という位置づけで断片的に引用されているだけに過ぎず、それによって思想を体系化できないのである。したがって、経部のテキストを確定することは経部の思想を解明する上でも極めて重要な意義があるといえよう。

その上で、松田（1982b）⁽¹⁾は、『縁起経釈』で所依の経典とされる『分別縁起初勝法門経』（*Ādiviśeṣavibhaṅgasūtra*）が、異熟識説を立てた経部の一派のものであるとされることから、『縁起経釈』は『成業論』と同様に、瑜伽行派の立場に近接した位置にありながらも、未だ経部の影響下にあると言及し、『縁起経釈』を経部のテキストとして位置づけられるとみなしている。しかし、この松田（1982b）より後に、『縁起経釈』の思想的立場について言及した研究はなく、また先の松田の仮説を検証した研究もない。

そこで、本稿では先行研究の成果を踏まえた上で、『縁起経釈』に説かれる思想が経部のものとされる思想と対応するかどうか分析検討し、松田（1982b）の指摘するように、『縁起経釈』が果たして経部のテキストとして位置づけられるのか否かを検討したい。

2. 『縁起経釈』のなかの経部説

ここでは『縁起経釈』に説かれる思想と、経部のものとされる説とを対比することで、『縁起経釈』の思想的立場を検討したい。

2.1. 有為法の生起

『俱舍論』「根品」では、有為法の生起の解釈をめぐる有部と経部が論争を展開している。有部は「四相」（生・住・異・滅）を説くのに対して、経部は「三相」（生・住異・滅）を説くのであるが、そこで経部の者たちは有為法の生起を「もと無くして今あること」と解釈する⁽²⁾。

AKBh 77, 5-12:

tatra pravāhasyādir utpādo nivṛttir vyayaḥ. sa eva pravāho 'nuvarttamānaḥ sthitiḥ. tasya pūrvāparaviśeṣaḥ sthityanyathātvam. …（中略）…

**jātir apūrho bhāvaṃ sthitiḥ prabandho vyayas taducchedaḥ |
sthityanyathātvam iṣṭaṃ prabandhapūrvāparaviśeṣa iti ||**

そのうち、相続のはじまりが生起であり、尽きるのが滅である。その同じ相続が続いて起りつつあるのが住である。そ〔の相続〕の前と後に区別のあることが住異である。…（中略）…

もと無くして今あることが生であり、住は連続であり、その断絶が滅である。

住異は連続の上の前後の区別であると認められる。

一方、『縁起経釈』の「序分」には次のように説かれる。

PSVy D. 5b3-6; P. 6a5-8:

rten cing 'brel bar 'byung ba'i rnam par dbye ba gang zhe na zhes bya ba nas brtsas te |
 ma rig pa la sogs pa'i rnam par dbye ba ston pa yin no || ma rig pa la sogs pa ni rten
 cing 'brel par 'byung ba ma yin gyi | 'o na ci zhe na | rten cing 'brel te byung ba yin no ||
 de ltar na bcom ldan 'das kyis mdo sde gzhan las gsungs te | rten cing 'brel bar 'byung
 ba gang zhe na | 'di lta ste 'di yod pas 'di 'byung zhes rgyas par yin no || rten cing 'brel
 te byung ba'i chos gang zhe na ma rig pa dang | 'de byed dang zhes bya ba nas | skye ba
 dang | rga shi zhes bya ba'i bar du yin no || 'di la dgongs pa ci yod ce na | rten cing 'brel
 bar 'byung ba zhes bya ba ni byung ba'i chos rnam kyī spyi'i mtshan nyid yin te | ma
 byung ba las byung ba'o ||

「縁起の分類とは何か」(*pratīyasamutpādasya vibhaṅgaḥ katamaḥ) ということから始まり、無明等の分類が説示されるのである。無明等は「縁起」(pratīyasamutpāda)ではない。ではどうか。「縁起したもの」(pratīyasamutpanna)である。同様に世尊は別の経で説かれる。「縁起とは何か。いわく、これあるとき〔かれあり、これ生ずるが故に〕かれ生ずる云々、縁起した法とは何か。無明・行、乃至、生・老死である⁽³⁾」と。ここにはいかなる密意があるかといえ、〔ここでの〕「縁起」とは生起した諸法の共相であって、〔すなわち〕もと無くして今あること (*abhūtvā bhava) である。

『俱舍論』第三章「世間品」第28頌 ab (hetur atra samutpādaḥ samutpannaṃ phalaṃ matam) にあるように、毘婆沙師は、經典にある縁起法 =pratīyasamutpāda とは無明等の十二支分のそれぞれを原因である側面からとらえたものとし、縁已生法 =pratīyasamutpanna は、同じ十二支分のそれぞれを結果である側面からとらえたものとする。世親は、これに対して無明等を縁起と捉えることは不合理であって、縁已生法ととらえるべきだとし、自らの縁起解釈を打ち出している。それは、縁起とは、縁已生法である無明等の十二支分の共通性、つまり、「もともと無かったものが今あること」としているのである。

また、『縁起経釈』の「老死支」にも次のように説かれる。

PSVy D. 50b5-6; P. 58b2-3:

rga shi ni gdon mi za bar 'byung ba yin te | 'dus byas kyī mtshan nyid yin pa'i phyir ro ||
 'byung ba ni skye ba yin no || 'jig pa ni 'chi ba yin no || gnas pa gzhan du 'gyur ba nyid ni
 rga ba yin no || gnas pa zhes bya ba ni rgyun yin par bstan to || de'i snga phyi'i bye brag
 ni ghzan du 'gyur ba nyid yin no ||

老・死 (jarāmarāṇa) は必ず (avaśyam) 生じる。有為〔法〕の相 (*saṃskṛtalakṣaṇa) であるから。〔有為法の相のうち〕「生」(jāti) が「生〔支〕」である。「滅」(nirodha) が「死〔支〕」である。「住異」(sthityanyathātva) が「老〔支〕」である。「住」(sthitī) とは「連続」(*prabandha) と示される。そ〔の相続〕の前と後に区別のあること (*tasya pūrvāparaviśeṣaḥ) が「住異」である。

ここでは、有為法の相として「生」(jāti)、「住異」(sthityanyathātva)、「滅」(nirodha) という三つの有為相のみが説かれ、四相としては解釈されない。そのため、ここには経部の定説である「有為法の生起」との関連が見いだせるのである。

2.2. 四大種の共存

『俱舍論』「根品」では、四大種の共存の仕方をめぐって、四通りの解釈が提示される⁽⁴⁾。そのうち、最後の四番目の解釈は次のように説かれる。

AKBh 53, 13-14:

bijatas teṣu teṣāṃ bhāvo na svarūpata ity apare. "santy asmin dāruskandhe vividhā dhātava" iti vacanāt.

他の人々は「これら〔水等〕の中に、それら〔火等〕の存在〔があるの〕は種子としてあるのであって、自体としてあるのではない」と〔主張する〕。〔経に〕「この枯木の堆積の中には種々の界がある⁽⁵⁾」と説かれるからである。

『俱舍論』では、この解釈は「他の者たち」(apare) の解釈として示されているが、称友はこれを「経部の者たち」(Sautrāntikāḥ) の解釈と註釈する⁽⁶⁾。それに対して、『縁起経釈』の「行品」には次のように説かれる。

PSVy D. 14a6-7; P 15b4-16a3:

sa bon zhes bya ba 'di ci zhe na nus pa'i bye brag yin no || nus pa zhes bya ba de chos gang zhe na | rgyu'i dngos po yin no | … (中略) … 'phags pa sha'a ri'i bus kyang ji skad du | dge slong bsam gtan pa rdzu 'phrul dang ldan pa sems la dbang thob pas shing gi sdong po 'di la khams gang dang gang mos par byas pa de dag kyang de bzhin du 'gyur te gzhan du ma yin no || de ci'i phyir zhe na | shing gi sdong po 'di la khams sna tshogs yod pas so zhes gsungs so || de la khams gang dang gang mos pa zhes bya ba ni sa la sogs pa'i mtshan nyid la khams zhes dgongs pa yin no || shing gi sdong po 'di la khams sna tshogs yod do zhes bya ba ni sa bon dang nus pa dang rgyu'i dngos po la khams

*zhes dgongs pa yin gyi | sa la sogs pa'i mtshan nyid kyi yan lag ni ma yin te | shing gi
sdong po gcig la bsam gtan pa'i mos pa'i bye brag tha dad pas yan lag rnam pa mtha'
med par 'gyur ba srid pa'i phyir yan lag mtha' med par thal bar 'gyur ba ma yin no || de
bas na rgyu'i dngos po de la khams zhes dgongs pa yin gyi | chos gzhan ni yod pa ma
yin te | 'di ni dpe gzhan yin no ||*

「種子」というこれは何か (*kim idaṃ bījaṃ nāma)。「特殊な能力」(*śaktiviśeṣa)である。「能力」(śakti)というそれは、いかなる存在 (dharma) であるか。「因性」(*hetubhāva) である。… (中略) …たとえば、聖者舍利弗によっても「禪定を修し、神通を有し、心を制御する比丘が、この木材の堆積をあれこれの界 (dhātu) にしようと強く念じる (勝解) と、それらもその通りになって、他のものとはならないのである。それはなぜか。この木材の堆積の中には種々の界があるからである (*santy asmin dāruskandhe vividhā dhātavaḥ)⁽⁷⁾」と説かれるごとくである。そのうち、「あれこれの界 (dhātu) にしようと強く念じる」とは、「地 [界] 等の相 (lakṣaṇa)」という意味で「界」(dhātu) と密意されたのである。[一方]「この木材の堆積の中には種々の界がある」とは、種子 (bija) や能力 (śakti)、因性 (*hetubhāva) という意味で「界」(dhātu) と密意されたのであって、地 [界] 等の相の一部 (*aṅga) が [密意されたの] ではない。一つの木材の中には禪定者の特殊な勝解の多様性により、一部 (*aṅga) を無量の種類に変化することができるから、無量の一部になるという過失に陥ってしまうことはない。ゆえに、この因性 (*hetubhāva) という意味で「界」(dhātu) と密意されたのであって、別個独立の法があるわけではない。これは別の喩例である。

ここでは、『俱舍論』「根品」において四大種の共存で用いられた教証が、同様に「種子」の喩例として、様々なものに変化可能であるという文脈において使用されているのが確認できる。そのため、この記述により、『縁起経釈』に説かれる思想と『俱舍論』において経部のものとされる説との対応関係が見いだせるのである。

2.3. 過去の業から時間を隔てて結果が起こることの否定

『俱舍論』「随眠品」の三世実有論争において、世親は「過去の業から [時間を隔てて] 結果が起こる」と説く有部に対して、経部の立場から次のように述べる。

AKBh 300, 19-21:

naiva hi sautrāntikā atītāt karmaṇaḥ phalotpatti varṇayanti. kiṃ tarhi. tatpūrvakāt saṃtānaviśeṣād ity ātmavādapraṭiśedhe saṃpravedayiṣyāmaḥ.

経部の者たちは、決して過去の業から [時間を隔てて] 結果が起こるとは説明しない。で

はどうか。それ（過去の業）を前提とする特殊な相続から〔結果が起こる〕ということをして「我論破斥の〔章〕」（破我品）において、我々は解説するであろう。

そして、この言葉通り、世親は『俱舍論』「破我品」において、この「相続の特殊な変化」について次のように解説する。

AKBh 478, 7-9:

yathā lakṣārasarañjitāt mātuluṅgapuṣpāt samtatipariṇāmaviśeṣajaḥ phale raktaḥ keśara upajāyate na ca tasmāt punar anyañ evaṃ karmajād vipākāt na punar vipākāntaram iti.
たとえば、ラクシャール（赤い染料）の液によって染められた、〔白い〕 マートゥルンガ⁽⁸⁾の花より、相続の特殊な転変から生じた赤い繊維が、果実の中に生み出される。しかし、そ〔の赤い繊維〕とは別のものが再び〔生み出されることは〕なく、それと同様に、業より生じた異熟〔果〕から、再び別の異熟〔果〕が〔生み出されることも〕ない。以上。

この『俱舍論』「破我品」に説かれる経部の思想と同様に、『縁起経釈』「識支」においても、世親は「行を縁として結生識が生ずる」という有部の説が成立しない理由について、次のように述べる。

PSVy D. 19b4-5; P. 21b8-22a4:

ji ltar rigs pa dang 'gal zhe na | 'du byed kyi rkyen gyis nying mtshams sbyor ba'i rnam par shes pa yin na ni 'das pa'i 'du byed kyi rnam par shes pa bskyed par thal bar 'gyur ro || ci nyes she na | bya gag shi nas skad 'byin par thal bar 'gyur ro || tshig 'di'i don ji lta bu zhe na | rgyu rnam par zhig pa las 'bras bu 'byung ba ma yin no zhes bya ba'i don to || kha cig na re rgyu zhig pa las kyang 'bras bu 'byung ba yod de | dper na ma tu lung ga'i 'bras bu skyur po las phyi ma skyur por 'gyur ba dang |... (中略) ... 'di ni glo bur du nyam nga bar zhugs pa yin no || 'di la nyam nga ba ci yod ce na | rgyu med pa la 'bras bu 'am | rnam par zhig pa las yod par rtog pa'o || skyur ba de rnam par zhig pa las physis skyur ba 'byung ba ma yin no || 'o na de gang las she na | de las skyes pa'i mthu'i bye brag dang ldan pa'i rgyun yongs su 'gyur ba'i bye brag las so ||

〔「行を縁として結生識が生ずる」と解釈した場合、〕どのように理証と矛盾するか。行を縁として結生識が〔生ずるの〕であれば、過去の行により〔時間を隔てて〕識が生ずるといふ過失に陥ってしまう。〔そのの〕何が過失か。「にわとりが死んでから鳴き声がする」といふ過失に陥ってしまう。この句の意味はどのようであるのか。原因が滅してから結果

が生ずるわけではないという意味である。一部の者たちは〔言う〕。「原因が減してからでも結果の生起はある。たとえば、酸性のマートゥルンガの果実から、後に酸っぱさへと変化するように。… (中略) …これは予期せぬ困難に見舞われる。これにどんな困難があるというのか。原因がないのに結果が〔生ずる〕、或いはすでに減した〔原因〕から〔結果が〕あると〔誤って〕構想されるのである。そのすでに減した酸性の〔マートゥルンガの果実〕から後に酸っぱさが生じるのではない。ではそ〔の酸っぱさ〕は何から〔生じるの〕か。そ〔の酸性のマートゥルンガの果実〕から生じた特殊な力を具えた相続の特殊な変化 (*saṃtatipariṇāmaviśeṣa) から〔酸っぱさが生じるの〕である。

ここでは、『俱舍論』において過去の業から結果が生ずることを認めないとされた経部の説と全く同じ解釈が説かれていることが確認できる。したがって、この『縁起経釈』の記述からも、経部説との対応関係が見いだせるのである。

2.4. 心不相応行法と形色との実在性の否定

『俱舍論』「根品」の、心不相応行法をめぐる議論において、世親は得 (prāpti) を初めとする心不相応行法の実在性をすべて否定したとされる⁽⁹⁾。また、『俱舍論』「業品」において、眼の対象である「色 (しき)」を顕色 (いろ) と形色 (かたち) との二つに分け、いずれをも実在と認める有部に対して、世親は経部の立場から「形色は実体としては存在しない」と主張した。

AKBh 194, 14-18:

nāsti saṃsthānaṃ dravyata iti Sautrāntikāḥ. ekadīn̄mukhe hi bhūyasi varṇa utpanne dīrghaṃ rūpaṃ iti prajñāpyate. tam evāpekṣyālpīyasi hrasvam iti. caturdīśaṃ bhūyasi caturasraṃ iti. sarvatra same vṛttam iti. evaṃ sarvam. tadyathālātam ekasyāṃ dīśi deśāntareṣv anantareṣu nirantaram āśu dṛśyamānaṃ dīrgham iti pratīyate. sarvato dṛśyamānaṃ maṇḍalam iti. na tu khalu jātyantaram asti saṃsthānam.

経部の者たちは「形色は実体としては存在しない」と〔主張する〕。なぜなら、顕色が一方の面に対してより多く生じたとき、「長い色である」と仮説し、その同じ〔顕色〕と比較して、より小さく〔生じた〕とき、「短い〔色である〕」と〔仮説し〕、四方により多く〔生じた〕とき、「四角形である」と〔仮説し〕、すべてにわたって平等に〔生じた〕とき、「円形である」と〔仮説する〕からである。〔他の〕すべて〔の形〕が同様である。たとえば、松明が一方向からそれぞれ別の場所に連続して速やかに見られるとき、「長い」と確認され、全体にわたって見られるとき、「輪である」と〔確認される〕。しかし、実際には形色は〔顕色とは〕別の種類ではないごとくである。

この『俱舍論』に説かれる経部説と同様に、『縁起経釈』「識支」においてもそれらを否定し、次のように説かれる。

PSVy D. 21a2-4, P. 23b1-2:

bcom ldan 'das kyis kyang 'du byed kyī phung po gang ji snyed pa 'di thams cad reg pa
la brten nas zhes gsungs kyang thob pa la sogs pa ni ma yin no || sems dang mi ldan pa'i
'du byed rdzas su yod pa yang ma yin la | gzugs la sogs pa rdzas su yod pa'i gnas skabs
gzhan la brtags pa yin te | dper na nus pa dang kun tu sbyor ba dang | rnam par phye
ba dang pha rol nyid dang tshu rol nyid dang | rgyang ring ba dang thag nye ba nyid lta
bu'o ||

また、世尊によっても「行蘊は何であれ、そのすべては触に依って〔生ずる〕⁽¹⁰⁾」と説かれているが、得 (prāpti) 等は〔説かれて〕いない。〔ゆえに〕心不相応行〔法〕(*cittaviprayuktāḥ saṃskārāḥ) は、実体としては存在せず (na dravyato 'sti)、実体として存在する (*dravyasat) 色 (rūpa) 等の、〔互いに〕異なる状態 (*avasthā) の上に仮説されるのである。たとえば、能力 (*sakti) や接続と分離 (*saṃyoga-vibhāga)、彼と此 (*paratvāparatva)、遠と近 (*dūrāntikatva)〔が仮説として存在する〕ごとくである。

世親はここで、心不相応行法の実在性を否定するとともに、「彼此」や「遠近」等と同様に、実有である色の、互いに異なる状態の上に仮説したものであると述べている。したがって、世親においては、顕色としての色は実在するが、形色としての色は仮説であるということも分かる。そのため、この『縁起経釈』の記述からも、先ほどの『俱舍論』における経部説との対応関係が見いだせよう。

2.5. 無表の否定

『俱舍論』「業品」の無表の実在をめぐる議論において、経部の者たちは無表について次のように述べる。

AKBh 196, 4-6:

sā 'pi dravyato nāstīti sautrāntikāḥ. abhyupetyākaraṇamātratvāt. atītāny api
mahābhūtāny upādāya prajñāptes. teṣāṃ cāvidyamānasvabhāvatvād rūpalakṣaṇābhāvāc
ca.

経部の者たちは〔主張する〕。「それ（無表）も実体としては存在しない。〔なぜなら無表とは〕単に誓いを立てて為さないことに過ぎないからであり、過去の諸大種に依って、仮説されたものだからである。また、それら〔過去の諸大種〕は、自性が現に存在しないか

らであり、また色の相が存在しないからである。

このように経部の者たちは、無表の存在を否定したとされる。『縁起経釈』「名色支」では、無表について次のように説かれる。

PSVy D 25a4-6; P. 28a5-8:

rnam par rig byed ma yin pa ji ltar gzugs yin zhe na | rnam par rig byed ma yin pa zhes
bya ba rdzas gzhan ni cung zad pa ma yin gyi | khas blangs ba dang chos nyid kyis lus
dang ngag ldog ba dang ldog pa ma yin pa tsam la de btags pa yin pa'i phyir ro || btags
pa can de ni gzugs med pa nyid yin no || mtshan nyid dang ldan pa nyid ma yin te |
gzugs yod pa la de brtags pa yin pa'i phyir ro ||

無表 (avijñapti) はいかにして色であるか。無表と呼ばれる〔色とは〕別の実体 (dravya) は少しも存在しないのであり、誓いと法性とによって、身と語と〔の表〕を離れる、或いは離れないことに過ぎないということの上に、それ(無表)が仮説されるからである。そのような仮説を有する〔諸法〕が無色に他ならない。〔無色という固有の〕相 (*nimitta) を有するのではない。現に存在する色に対して、それ(無表)が仮説される〔に過ぎない〕からである⁽¹¹⁾。

ここでは『俱舍論』に説かれる経部説と同様に、無表と呼ばれる別な実体は少しも存在しないと説かれている。そのため、この『縁起経釈』の記述からも、先ほどの経部説との対応関係が見いだせるであろう。

2.6. 煩惱の已断・未断

『俱舍論』「根品」の得・非得の議論において、有部はこの得・非得によって、煩惱の已断(聖者)と未断(凡夫)も区別されると主張する。それに対して、世親は経部の立場から次のように説明する。

AKBh 63, 18-21:

āśrayaviśeṣād etat sidhyati. āśrayo hi sa āryāṇaṃ darśanabhāvanāmārgasāmarthyāt
tathā parāvṛtto bhavati yathā na punas tatpraheyāṇaṃ kleśānāṃ prarohasamartho
bhavati. ato 'gnidagdhābrihivad abijbhūte āśraye kleśānāṃ prahīṇakleśa ity ucyate.
upahatabijabhāve vā laukikena mārgeṇa. viparyayād aprahīṇakleśaḥ.

このこと(煩惱の已断・未断)は、所依の違いによって成り立つ。なぜなら、聖者たちにあるその所依は、見〔道〕・修道の機能によって、そ〔の見・修〕所断の諸々の煩惱が再

び芽を出すことができなくなるように、そのように転換しているからである。ゆえに、火で焼かれたもみのように、所依が諸々の煩惱の種子でなくなったとき、「煩惱をすでに断じた者」と言われる。或いは、世間道によって〔諸々の煩惱の〕種子性（煩惱を生み出す機能⁽¹²⁾）が害されているとき、「〔煩惱を断じた者〕と言われる」。逆の場合に「煩惱を未だ断じていない者」〔と言われる。〕

経部の者たちによれば、煩惱の已断（聖者）と未断（凡夫）との違いとは、所依の違いによるのであり、聖者の場合は、所依が二度と再び、諸々の煩惱の種子性を起こすことができなくなるように転換しているからであるとされる。一方、『縁起経釈』「渴愛支」では、阿羅漢に渴愛が生じない理由について次のように述べられる。

PSVy 室寺（1991）, 79-81⁽¹³⁾:

yadi vedanāpratyayā tṛṣṇā sarvasyāsti vedanety arhato 'pi tṛṣṇāprasaṅgaḥ. naiṣkramyās ritasaumanasyādyabhāvaprasaṅgaḥ. yan meghapratyayā vṛṣṭir ity ucyate. kiṃ meghe saty avaśyaṃ vṛṣṭir bhavati. evaṃ satyām api vedanāyām nāvaśyaṃ tṛṣṇā bhavati. kiṃ punaḥ kāraṇaṃ na bhavati. pratipakṣaviśeṣayogāt. bījam evāsyā uddhṛtaṃ bhavaty āśrayād upahataṃ vā. yataḥ saty api pratyaye nirbījā notpadyate. upahatabījā vā. yathā saty api kṣetrodakādipratyaye (na) nirbījo 'ṅkuraḥ prādurbhavaty. upahatabījo vā.

もし「受を縁として渴愛が〔生ずる〕」のであれば、すべての人に受が存在するので、阿羅漢にも渴愛があることになってしまう。出離に依存する喜等⁽¹⁴⁾も存在しないことになってしまう。「雲を縁として雨が〔降る〕」と言われるが、雲があれば必ず雨が降るのか。〔そうではあるまい。〕同様に、受があっても、必ず渴愛が生じるわけではない。では、なぜ〔渴愛が〕生じないか。特定の対治と結びついているからである。他ならぬこ〔の渴愛〕の種子が、所依から引き抜かれる、或いは害される。ゆえに、縁（受）があっても種子のない、或は種子が害されているならば、〔渴愛は〕生起しないのである。たとえば、畑や水等の縁があっても種子がないならば、或いは種子が害されているならば、芽が出現しないのと同じである。

ここでは、特定の対治と結びつくことによって、渴愛の種子が所依から引き抜かれる、或いは害されているから阿羅漢（聖者）には受が生じないと説かれている。そのため、この記述からも先ほどの経部説との対応関係が見いだせるのである。

2.7. 随眠の解釈

『俱舍論』「随眠品」では、「欲貪随眠」（kāmarāgānuśaya）という合成語の解釈をめぐる

て、有部と經部との意見が分かれ論争になる。そこで、經部の者たちは次のように解釈する。

AKBh 278, 17-19:

evaṃ tu sādhu yathā sautrāntikānām. katham ca sautrāntikānām. kāmarāgasyānuśayaḥ kāmarāgānuśaya itī. na cānuśayaḥ samprayukto na viprayuktas. tasyādravyāntaratvāt. prasupto hi kleśo 'nuśaya ucyate. prabuddhaḥ paryavasthānam.

一方で、〔この点については〕 經部の者たちのように〔考える〕のが正しい。では經部の者たちはどのように〔考えるの〕か。「欲貪の随眠が欲貪随眠である」と〔考えるのである〕。しかし、随眠は相応するものでもなく、相応しないものでもない。それ（随眠）は別な実体ではないからである。なぜなら、眠っている煩悩が随眠と呼ばれ、覚めている〔煩悩〕が纏と〔呼ばれる〕からである。

このように經部の者たちは、「欲貪随眠」という合成語を「欲貪の随眠」と Tatpuruṣa の合成語と解釈する。『縁起經釈』「有支」において、次のような記述が見られる。

PSVy D. 47a4-5; P. 54a3-5:

de dag thams cad kyi lus la sred pa ma spangs pa ni sa de las 'dod chags dang ma bral ba rnams de mngon par 'grub pa'i rgyu yin no zhes bya ba skyon med pa yin no || ji ltar ma spangs pa yin zhe na | de'i phra rgyas ma bcom pa'i phyir ram | 'jig rten pa'i lam gyis nyams ma smad pa'i phyir ro ||

それらすべて (*teṣāṃ sarveṣāṃ) の身体に対する渴愛を断じておらず (*aprahīṇa)、その地から離染していない者たちは「起のための因はそれ（渴愛）である」という過失はないのである。どうして〔身体に対する渴愛を〕断じていないのか。それ（渴愛）の随眠が未だ断じられていないから、或いは世間道によって弱められていないからである。

この「それ（渴愛）の随眠」という表現は、Tatpuruṣa の解釈を暗示しており、經部的であるといえよう。

2.8. 經を量とし論を量としない

『俱舍論』では、經部が「經を量（判断基準）とし、論を量としない」と語ったということが説かれている⁽¹⁵⁾。なかでも『俱舍論』「定品」では、毘婆沙師が、「君たちの考えであれば論と違背する」と批判するのに対して、經部の者たちは次のように述べる。

AKBh 397, 15:

varam śāstravirodho na sūtravirodhaḥ.

たとえ論に違背しても経に違背しない方が優るのである。

このように経部には論よりも経を重視するという姿勢がある。一方、『縁起経釈』では縁起の解釈が『発智論』と違背するという批判に対して次のように答えている。

PSVy D. 54a6; D. 63a1-2:

bstan bcos dang 'gal ba ni tshod yod kyi mdo sde dang 'gal na mi rung ngo ||

たとえ論に違背することがあっても、経に違背するなら理に適わないのである。

このように『縁起経釈』においても論よりも経を重視する記述が見られる。このことは極めて経部的な態度であり、経部との関連を容易に確かめられるであろう。

3. おわりに

以上、この小論では『縁起経釈』に説かれる思想と、経部のものとされる説を対比することで、『縁起経釈』の思想的立場を検討した。検討の結果、『縁起経釈』は多くの点で、経部のものとされる説と対応していることが明らかとなった。このことから、松田（1982b）の指摘する通り、世親の『縁起経釈』は経部のテキストとして位置づけられるであろう。

〔注〕

- (1) この他の『縁起経釈』に対する松田の研究については、以下の通りである。cf. 松田（1982b, 1984a, 1984b, 1984c）。
- (2) また、四大種の共存をめぐる議論については加藤（1989, 148-172）を参照。
- (3) cf. 本庄（2014a, 353-356）, AKUp [3037]。
- (4) 四大種の共存をめぐる議論については加藤（1989, 148-172）を参照。
- (5) cf. 本庄（2014a, 176-177）, AKUp [2020]。
- (6) cf. AKVy 125, 5-7: bijatas teṣu teṣāṃ bhāvo na svarūpata ity apara iti sautrāntikāḥ.
- (7) cf. 本庄（2014a, 176-177）, AKUp [2020]。
- (8) 当該箇所「相統転変差別説」については佐古（1998）を参照。また、このマートゥルンガの喩例については室寺（1994）にまとめられている。なおこのマートゥルンガの喩例が、遡れば馬鳴に帰するものであることは上野（2015）を参照。
- (9) cf. AKBh 62, 14ff.
- (10) cf. 本庄（2014b, 809-815）, AKUp [7007]。
- (11) cf. 荘（2013b, 59-60）。
- (12) cf. 兵藤（1980）。
- (13) cf. PSVy D. 37a3-5; P. 42a5-42b1: gal te tshor ba'i rkyen gyis sred pa yin na tshor ba thams cad la yod pas dgra bcom pa la yang sred pa yod par thal bar 'gyur ro || nges par 'byung ba la brten pa'i yid bde ba la sogs pa yang med par thal bar 'gyur ro zhe na | gang dag sprin gyi char pa

zhes ston na ci sprin yod na gdon mi za bar char pa 'bab pa yin nam | de bzhin du tshor ba yod kyang gdon mi za bar sred pa 'byung ba ma yin no || ci'i phyir mi 'byung zhe na | gnyen po'i bye brag dang ldan pa'i phyir ro || 'di'i sa bon nyid gnas nas bston pa'am mnan pa yin te | gang gi phyir rkyen yod du zin kyang sa bon med [dam] mnan na mi skye ba yin no || dper na zhing dang chu la sogs pa'i rkyen yod du zin kyang sa bon med pa'am mnan pa ni myu gu 'byung bar mi 'gyu ba bzhin no ||

- (14) cf. 本庄 (2014a, 415-417) , AKUp [3069] . PSVyṭ D. 173a7-173b1; P. 207a3-4: nges par 'byung ba la brten pa'i yid bde ba la sogs pa yang med par thal bar 'gyur ro zhes bya ba la nges par 'byung ba la brten pa yid bde ba drug dang yid mi bde ba drug dang | btang snyoms drug med par thal bar 'gyur te | sred pa'i gnyen por gyur pa ni nges par 'byung ba la brten pa yin pas so || nges par 'byung ba yang 'dod chags dang bral ba la bya'o || 出離に依存する喜等も存在しないことになってしまうとは、出離に依存する六つの喜と、六つの憂と、六つの捨とが存在しないことになってしまう。渴愛の対治となったものが出離に依存するものだからである。また、出離 (naiṣkramya) とは離染 (virāga) という意味で言われる。

- (15) cf. AKBh 146, 3f; 397, 16; 本庄 (1992b) .

〔略号表〕

AKBh	<i>Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu</i> , Ed. by P. Pradhan. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1967.
AKVy	<i>Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā</i> . Ed. by Unrai Wogihara, Tokyo: Association of Abhidharmakośavyākhyā, 1932-1936.
PSVy	<i>Pratītyasamutpādavyākhyā</i> . (Tib. <i>rtēn cing 'brel bar 'byung ba dang po'i nram par dbye ba bzhad pa</i>): D 3995, P 5496.
LA	<i>Abhidharmakośaṭīkā Lakṣaṇānusārīṇī</i> . (Tib. <i>Chos mngon pa'i mdzod kyi 'grel bshad mtshan nyid kyi rjes su 'brangba zhes bya ba</i>): D4093, P5594.
T.	大正新脩大藏經 .
『縁起経釈』	PSVy
『俱舍論』	AKBh
『順正理論』	衆賢造、玄奘訳『阿毘達磨順正理論』(T. No. 1562).
『中阿含』	瞿曇僧伽提婆譯『中阿含經』(T. No. 26).
『婆沙論』	五百大阿羅漢造、玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』(T. No. 1545).

〔参考文献〕

- Giuseppe Tucci 1930 *A Fragment from the Pratītya-samutpāda-vyākhyā of Vasubandhu*, JRAS: 611-623.
- Muroji Yoshihito 1993 *Vasubandhu's Interpretation des Pratītyasamutpāda*. Alt- Und Neu-Indische Studien 43, pp. 1-259. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Tripāṭhī Chandrabhāl 1962 *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamyukta*. Sanskrit text aus den Turfanfunden 8, Berlin: AkademieVerlag.
- 上野牧生 2015 「アシュヴァゴーシャの失われた莊嚴経論」, 『インド論理学研究』 8, 203-234.
- 加藤純章 1989 『経量部の研究』, 春秋社 .
- 楠本信道 2007 『『俱舍論』における世親の縁起観』, 平楽寺書店 .
- 佐古年穂 1998 「『俱舍論』並びに『成業論』における saṃtatipariṇānaviśeṣa について」, 『印仏研』 46-2, 160-164.
- 莊崑木 2013a 「世親作『縁起経釈』の触支解釈—心の構造と認識—」, 『仏教文化研究論集』 第15・16号, 26-57.

- 2013b 「世親作『縁起経釈』の名色支について」, 『インド哲学仏教学研究』20, 43-63.
- 孫儷茗 2000 「『順正理論』における四諦説の研究—集諦を中心として—」, 『印仏研』49-1, 98-100.
- 堀内俊郎 2016 「『縁起経釈論』の「生」「老死」解釈訳注」, 『国際哲学研究』5, 203-210.
- 本庄良文 1989 『梵文和譯 決定義経・註』, 民族社.
- 1992b 「Sautrāntika」, 『印仏研』40（2）, 61-66.
- 1992e 「貪（rāga）と愛（trṣṇā）との同異」, 『仏教論叢』36, 12-14.
- 2001b 「世親の縁起解釈」, 『仏教文化の基調と展開 石上善応教授古稀記念論文集』1, 259-272.
- 2014ab 『俱舎論註ウパーイカーの研究 訳註篇 上下』, 大蔵出版.
- 中島正淳 2020a 「『縁起経釈』「触支」における世親の認識の構造—前五識と意識の生起に対する世親の解釈—」, 『仏教学会紀要』25, 111-131.
- 松田和信 1982a 「世親『縁起経釈（PSVy）』におけるアーラヤ識の定義」, 『印仏研』31-1, 63-66.
- 1982b 「『分別縁起初勝法門経（ĀVVS）』—経量部世親の縁起説—」, 『仏教学セミナー』36, 40-70.
- 1983a 「Abhidharmasamuccaya における十二支縁起の解釈」, 『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』1, 29-50.
- 1984a 「Vasubandhu 研究ノート(1)」, 『印仏研』32-2, 82-85.
- 1984b 「Vasubandhu における三帰依の規定とその応用」, 『仏教学セミナー』39, 1-16.
- 1984c 「ヴァスヴァンドゥの『縁起経釈論』についての中間報告」, 『大谷学報』64-2, 52-53.
- 1986 「『成唯識論述記』の伝える世親『縁起論』について」, 『印仏研』35-1, 388-391.
- 2005 「ヴァスヴァンドゥにおける縁起の法性について」, 『佛教大学総合研究所紀要別冊 仏教と自然』, 125-132.
- 室寺義仁 1986 「『俱舎論』・『成業論』・『縁起経釈』」『密教文化』156, 53-82.
- 1994 「アートマンなきカルマの成熟—《マートゥルンガの比喩》を巡る覚書」, 『仏教学会報』18・19, 15-25.
- 山口 益 1951 『世親の成業論』, 法蔵館.

（なかじま しょうじゅん 文学研究科仏教学専攻博士後期課程）

（指導教員：松田 和信 教授）

2022年9月29日受理